

いつ、どんな英語学習を経験した学生が入学するのか？～入試・学習指導要領の改訂予定と対応学年【図1】

年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027
大学入試改革											高等学校基礎学力テスト(仮称)導入[4技能]	大学入学希望者学力評価テスト(仮称)導入[4技能]					
学習指導要領改訂						答申(小中高)告示(小中)	告示(高)	先行実施	小学校で新課程完全実施	中学校で新課程完全実施	高1で新課程完全実施	高2で新課程完全実施	高3で新課程完全実施/入試対応				
1999年度生まれ	小6(外国語活動必修化)	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大学1									
2002年度生まれ			小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3/新入試	大学1						
2004年度生まれ					小5	小6	中1	中2	中3 全国学力調査(英語4技能)導入	高1	高2	高3	大学1				
2006年度生まれ							小5	小6	中1	中2	中3 新課程対応	高1 新課程対応	高2 新課程対応	高3 新課程対応	大学1		
2008年度生まれ								小5	小6 (高学年英語教科化)	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大学1	
大学入学者の変化						現在	小学校外国語活動実施学年入学			新大学入試実施学年入学			中3全国学力調査・英語4技能テスト実施学年入学		高校新指導要領学年入学		小学高学年英語教科体験学年入学

*文部科学省資料を参考に作成。2016.8.26現在

英語力育成の低学年化・高目標化～グローバル化に対応した外国語(英語)学習指導要領の主な変更点【図2】

目標(CEFR*)	新学習指導要領	現行学習指導要領	英語資格・検定試験とCEFRとの対照表
B2	大学や海外、社会で英語力などを伸ばす基盤を確実に育成		英検 準1級(2304-3000) GTEC CBT 1250-1399 GTECIS(4技能) 980 IELTS 5.5-6.5 TOEFL iBT 72-94 TOEIC(4技能) 1095-1300
B1			英検 2級(1980-2500) GTEC CBT 1000-1249 GTECIS(4技能) 815-979 IELTS 4.0-5.0 TOEFL iBT 42-71 TOEIC(4技能) 790-1090
A2	高校 ・授業は英語で行うことを基本とする ・科目を再構成(英語コミュニケーション、論理・表現) ・1800～2500語程度(卒業段階で4000～5000語程度)	高校 ・授業は英語で行うことを基本とする ・1800語程度(卒業段階で3000語程度) ・英検準2級～2級程度以上50%目標	英検 準2級(1284-1800) GTEC CBT 700-999 GTECIS(4技能) 565-814 IELTS 3.0 TOEFL iBT 385-785
A1	中学校 ・教科・英語、年間140コマ(週4コマ) ・授業は英語で行うことを基本とする ・1600～1800語程度	中学校 ・教科・英語、年間140コマ(週4コマ) ・「聞く/話す/読む/書く」の4技能の総合的育成 ・1200語程度 ・英検3級程度以上50%目標	
	小学校 (5・6年生) ・教科・英語新設、年間70コマ(週2コマ)程度 ・「読む/書く」素地も育成し、コミュニケーション能力の基礎を養う ・学級担任が指導、専科指導教員・ALT等も活用 ・小学校全体で600～700語程度	小学校 (5・6年生) ・外国語活動、年間35コマ(週1コマ) ・「聞く/話す」中心のコミュニケーション能力の素地を養う ・学級担任を中心に指導	英検 3級～5級(419-1650) GTEC CBT 699- GTECIS(4技能) 564 IELTS 2.0 TOEFL iBT 200-380
	小学校 (3・4年生) ・外国語活動新設、年間35コマ(週1コマ)程度 ・「聞く/話す」中心のコミュニケーション能力の素地を養う ・学級担任が指導、ALT等も活用		

*英語4技能試験情報サイト「資格・検定試験CEFRとの対照表」から引用。2016年8月末現在。http://4skills.eiken.or.jp

*文部科学省資料を参考に作成。2016年8月26日現在

この「外国語活動」を小学校のときに経験した子どもたちが、いよいよ2018年度から大学に入学してきます(図1・2)。

英語力が目標を下回る理由の一つは入試にあり

このように学習指導要領は4技能の育成をめざしているのにも関わらず、文部科学省の調査の結果、目標としている英語力が子どもたちに身につけていないことが明らかにになりました。例えば高校3年生の英語力の目標(第2期教育振興基本計画)は、「英検準2級程度」2級程度以上(必修科目でCEFRのA2相当、選択科目で同B1相当以上)の生徒の割合50%とされていますが、「英語力調査結果」(P.4図3)によると、4技能の目標はいずれも未達で、特に「話す」「書く」能力に課題があることがわかります。

実際、高校の英語の先生は「生徒が英語を使う言語活動を行う」「生徒が自分の考えを英語で話す」「4技能のバランスを考慮して指導する」「複数の技能を統合的に用いる」ことなどを「とても重要だ」と思っていますが、それを授業で十分には実行できていないという実状が見て取れます(図4)。

*1 CEFR(セファール):外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages)。欧米で幅広く導入されつつある、語学のコミュニケーション能力のレベルを示す国際標準規格。レベルはA1、A2(A:基礎)、B1、B2(B:自立)、C1、C2(C:熟達)の6レベルがあり、C2が最も習熟度が高い。



誰のため？ 何のため？
効果的な方法は？

Go Next!

とりあえずな 「グローバル化」 からの脱却

グローバル化の進展により、人の移動や、経済活動、情報・技術など、あらゆる活動が国境を越えて展開され、変化の激しいこの時代。こうした中、多くの大学は「グローバル人材育成」に取り組んでいる。その土台となる英語教育の変化と、実際の大学事例から課題と展望を考える。



ベネッセ教育総合研究所
グローバル教育研究室室長
加藤 由美子
かとうゆみこ ●(株)ベリリッツ・シンガポール校学校責任者、ベネッセの英語教育事業カリキュラム、講師養成プログラム開発担当を経て現職。幼児から高校生までの英語指導実践研究を行う。

ここまで来た、グローバル教育の波 初等中等教育の 英語教育の変化

4技能の育成をめざす 現行学習指導要領

文部科学省は、グローバル化に対応した人材育成のため、現学習指導要領(2011年度から小中高順次完全実施)のもと、4技能のバランスの取れた英語力、具体的に「聞く/話す/読む/書く」力を、バランスよく育成することをめざしています。

象徴的なのは、小学校5・6年生で週1コマの「外国語活動」が始まったことでしょうか。高校では、「話す/書く」といった表現力を伸ばすための「英語表現」が導入されました。文部科学省は、子どもたちがグローバル社会で活躍できるように、使える英語力の育成を強化していると言えます。

子どもたちの英語に対するモチベーションが高まっている一方で、英語力は目標通りに上がっていない

さらに高校の英語の先生に指導上の悩みを聞いたところ、「生徒に学習習慣が身につけていない」「英語教師に求められることが多い」「英語教師に求められることが多くて負担」「コミュニケーション能力の育成と、入試のための指導を両立させることが難しい」などが上位にあげられました(図5)。

3番目にあげられた大学入試に関しては、*2文科省発表資料によると、2015年度入試において英語のスピーキング技能を評価した大学は、3.4%(25/746校)にすぎませんでした。つまり、入試が4技能を評価するものになっていないことが、高校の英語授業の変革の阻害要因の一つとなっているのです。

小学校から大学までの教育の接続がカギ

一方、*3英語の学習に関する別の調査から、英語が苦手になる子どもが多いのは、中学1年と高校1年ということがわかっていま

す。このタイミングで苦手な子どもが増えるのは、子どもたちが進学した学校の学びにうまく対応できないことが考えられます。例えば、小学校では音声中心の「外国語活動」が中学校での文字中心の学習につながりにくい、高校に進学すると教科書本文の難度が一気に上がる、という研究結果もあります。ここには、高校入試や大学入試から逆算して授業が行われ、教科書が作られる、という背景があるとされています。

入試改革と指導要領改訂で本格化する4技能育成

文科省は、このような現状を打開するために、学習指導要領の改訂(P.3図2)、中学3年生に4技能の英語学力調査の実施、大学入試での4技能評価、などの施策を実行しようとしています。現在検討中の次期学習指導要領の改訂のポイントは、次の4点にまとめられています。

グローバル人材に必要な英語力育成のために大学がやるべきこと

識者に聞く!

4技能重視に舵を切り始めた大学入試と学習指導要領。この流れを踏まえ、大学入試・大学教育の課題と、今後の英語教育はどのように変わっていくべきかについて、有識者に意見を伺った。

東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 教授 **根岸 雅史**

ねがしまさし ● 東京外国語大学卒業後、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、レディング大学大学院言語学研究所修士課程修了。同大学より博士号取得。公立高校教師、東京外国語大学助手などを経て、現職。文科省実施の「英語教育改善のための英語力調査事業」結果の分析・活用のための検討委員会の委員等、国や地方自治体の各種英語教育委員を務める。

大学入試が変われば、初等中等教育は変わる

2020年度導入予定の「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を始めとして、今後大学入試の英語で4技能を問う流れは、より強まっていくと考えられます。しかし、この流れが国の主導する一部の入試のみにとどまれば、改革の成果は限定されてしまうでしょう。例えば、翻訳(和訳・英訳)問題はセンター試験では出題されていませんが、各大学の個別試験ではある程度出題されています。こうした入試は、授業を4技能重視に変えない高校側の言い訳になります。英語力を伸ばしている高校を調べたところ、訳読ではなく、英語での授業を行っていることがわかりました。英語を聞いて、英語で考え、英語で発信するという言語処理を繰り返すことで、英語力の「幹」を育てています。「幹」を育てずに、「枝葉(受験テクニック)」を先に育てていくのは英語力は高まりません。まず「幹」を太く育てるためにも、すべての大学で4技能型の試験を取り入れていく姿勢が必要なのです。

技能別に適切なクラス分けを

大学の英語教育で大切なことは、学生の英語力を4技能ごとに把握し、それに応じた授業をすることです。リスニングのスコアでスピーキングのクラス分けをしたり、総合点のみでクラス分けをしたりしても、クラス分けはうまく機能しないことになってしまいます。また、4技能の能力ごとに適切なクラス分

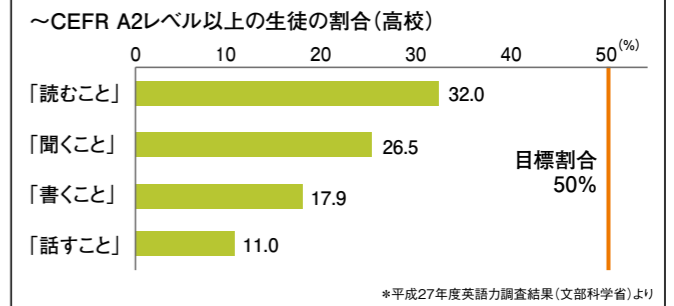
けができたとしても、対応した教え方ができるかという問題もあります。特に、技能が低い学生に教えるには技術が必要です。技能やレベルによっては、英語教授法の訓練を受けた外国人講師などの利用も選択肢としてはあるでしょう。こうした学生の英語力、授業内容、求められる教員の特性を踏まえてマッチングできるコーディネーターの存在が今後重要になります。

卒業後のイメージをもとに語学教育を

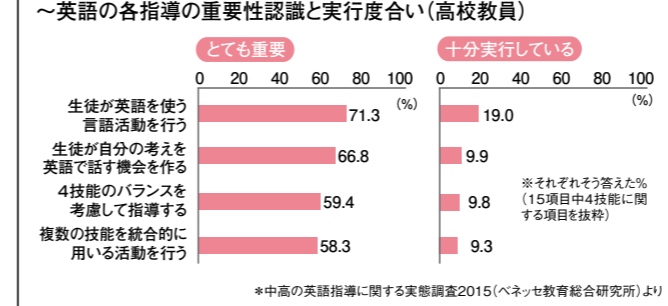
英語力を伸ばすには、めざす目標は高いほどいいと思われがちですが、達成を保證できるレベルでなければ意味がありません。学生が卒業後に英語をどのような場面でのように使うのか、イメージしてみてください。例えば、小売業なら簡単な口頭のコミュニケーション、医師なら問診したり症状や治療方法について口頭で説明したりする能力が必要といったように、大学・学部によって英語に対するニーズは異なることと思います。それらのニーズ分析に合わせてCAN-DOリスト*を作成して目標設定することが必要です。中高の英語教員養成の場においても、これまで訳読中心の授業を受けてきて、英語で授業を行うことがイメージできない学生も多数います。こうした学生に英語で授業を行うロールモデルを示していくことも大学の責任です。大学は、学生が社会に出る前の最後の砦です。学生がグローバル社会に出てでも活躍できるような英語教育に変えていくことが今、求められています。

*英語で「○○ができる」の形で表示した言語活動の一覧。レベル別の学習到達目標として用いられる。

英語力育成の目標はいずれも未達、特に「書く」「話す」が低達成



「自分の考えを英語で表現する機会を作る」[図4] ことは重要だが、十分に実行できていない



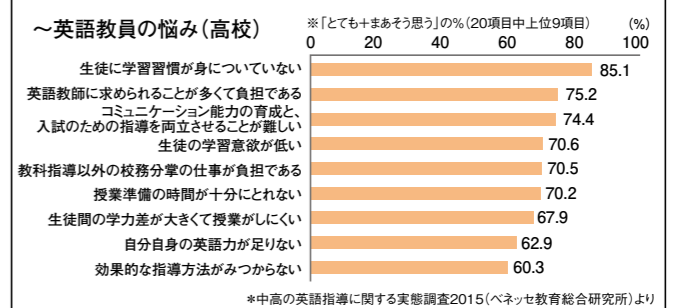
- ① 小学校3・4年生から「外国語活動」を開始
 - ② 小学校5・6年生の「外国語活動」を「教科」に
 - ③ 中学校では、「英語による英語授業」を強調
 - ④ 高校では、英語の科目再編を行い、「論理・表現」を設置
- これらの改訂のねらいは、4技能レベルのさらなるアップです。

保護者と子ども意識は「早期化と多様化」

学校教育以外の状況も見てみましょう。昨今のグローバル化の動きをキャッチして、子どもに幼児期から英語活動を体験させる保護者が増えているようです(図6)。私立の幼稚園や保育園のなかには、英語の活動を盛り込むことで差別化を図ろうとしているところもあります。内容はさまざまですが、英語教育は早期化・多様化をしてきていると言えます。

高校生の英語に関する意識も変わってきています。*3英語に対する意識調査で、「英語ができる」と就職に役に立つ」と答えた高校生は88.9%でした。小学校で「外国語活動」を学んでいる5・6年生への*4調査でも、61.5%の児童が「教室の外で英語を使ってみ

教員は、入試対応、自分の英語力の不足、指導方法など多くの悩みを抱えている



4割超が中学校以前に校外での英語学習経験あり

	中1生	中2生	中3生	高1生	高2生	高3生
学校外での英語学習あり	47.3	44.5	41.7	40.7	42.1	42.1
幼稚園や保育園	13.7	10.3	15.4	11.9	11.1	9.6
英会話教室	48.0	49.9	54.2	59.4	57.7	53.6
学習塾	41.7	36.9	36.1	32.0	33.3	39.1
通信教育の英語教材	11.5	12.6	11.9	8.1	9.0	8.1
書店で売られている教材	5.2	4.6	4.0	3.8	4.0	2.9
インターネット教材	3.8	2.7	3.5	2.1	1.9	2.9
家庭教師	2.0	2.7	2.0	1.9	2.8	3.2

たい」と答えています。グローバル化が進んだ現在の児童・生徒の英語に対する意識が、かなり変わってきていると言えます。

2021年度入学生への英語教育のポイント

現在、文科科学省内で大学入試改革の検討が進んでいます。学力の3要素を多面的・総合的に評価することが大方針ですが、もう一つの大きな変更点は、英語は4技能を評価する、というものです。

2021年度大学入試から英語の4技能が評価されるようになれば、高校の英語の指導内容は大幅に変わる可能性があります。まさに、高校の英語の先生が悩んでいる「コミュニケーション能力の育成と、入試のための指導を両立させることが難しい」ことが解決されようとしているのです。

さらに、小学校で次の学習指導要領の完全実施後の英語教育を受けてくる2027年度の大学入学者は、4技能の授業やテストの経験を経て、大学の英語教育に新たな期待を持って入学してくるはずです。それまでに、その大学ならではの「真のグローバル社会に対応した英語教育」を確立することが求められます。